

# 15万6千人を超える来場者で賑わった「CEATEC JAPAN 2018」

神谷 直亮

「つながる社会、共創する未来」をテーマに掲げた第19回「CEATEC JAPAN 2018」が、10月16日から19日まで幕張メッセ（千葉市美浜区）で開催された。事務局の発表によれば、出展者は、昨年の667を上回る725社・団体（内、海外からの出展者は、19カ国・地域から206社・団体）で、総登録来場者数は、昨年より3,977人多い156,063人に達したという。

2016年以来、主催者は「脱・家電見本市」を宣言しているが、今回の会場でひときわ目立ったのは、やはり4K8Kに関する家電の展示とデモであった。特に今年は、12月1日から新4K8K衛星放送が始まることもあり、来場者の関心も集まったと思われる。

今回、4K8Kの分野を主導したのは、シャープ、放送サービス高度化推進協会（A-PAB）と電子情報技術産業協会

（JEITA）、ソシオネクストだ。

シャープは、ひと際大きなブースを構えて「AQUOS 8K ワールド」を展開して脚光を浴びた。まず、同社は、世界初の8K衛星放送チューナー内蔵テレビを出展して先駆けの功名を欲しいままにしていた。ブースに並んだのは、60、70、80型の3種の8Kテレビでいずれも120Hz対応である。発売日については、「11月17日から」と語っていた。次いで、外出しの8Kチューナーも展示して徹底した対応をアピールした。発売は、テレビと同時とのことであった。さらに、同社は8Kで採用された22.2チャンネル三次元立体放送を実現するシアターバーシステムと、8K放送の録画ができるハードディスク「AQUOS 8K HDD」もあわせて紹介した。この他、5Gを活用する8Kマルチチャンネル同期伝送のデモや世界最小・8K内視鏡カメラの出展でも注目を集めていた。なお、同社の8Kチューナー内蔵液晶テレビ「AQUOS

8K AXシリーズ」は、「CEATEC2018」で「トータルソリューション部門賞」に輝いた。

A-PABとJEITAは、共同でブースを構えて、新4K8K衛星放送をサポートするほとんどの製品の揃え裾野が広がっている現状をアピールした。まず、チューナー内蔵4Kテレビについては、東芝の65インチ、シャープの60インチ、三菱電機の58インチ、ピクセラの55インチ、ハイセンス・ジャパンの50インチを並べて「家庭での視聴環境が整ってきている」と強調していた。細かい話になるが、東芝はすでに発売済みで、三菱電機は10月18日、シャープは11月17日、ピクセラは今年末に発売する予定という。中国のハイセンス製4K液晶テレビ「A6800」は、初めて見る製品であったが、説明員によれば「すでに日本法人を設立して、2018年内に発売できるように準備を整えている」とのことであった。

次いで、4Kチューナーに関しては、ピクセラ、パナソニック、ソニー、東芝、シャープ、マスプロ、DXアンテナ、IOデータの8社の製品が紹介された。ピクセラは、すでに10月から販売を開始しており、他のメーカーも年内には発売する予定とのことであった。

さらに、パナソニック、シャープ、ピクセラの3社は4Kチューナー内蔵レコーダーも披露した。パナソニックは11月16日に、シャープは11月24日に発売



写真1 シャープは、「AQUOS 8K ワールド」を展開して来場者の目を引いた。



写真2 A-PABとJEITAは、共同でブースを構えて、新4K8K衛星放送をサポートするテレビやチューナーなどを一斉に公開した。



写真3 ソシオネクストは、8K映像の撮影から再生までのフローを分かりやすく説明していた。



写真4 KDDIは、ODG製スマートグラスを装着して、スタジアムでバッティング体験ができるコーナーを設けて人気を得ていた。



写真5 富士通は、コミュニケーションロボット「ロボピン」とHTC[VIVE]のVR機能を連動させたデモを実施して脚光を浴びた。

予定である。

視聴者を多く抱えるケーブルテレビ業界の新 4K 衛星放送対応が気になるところであるが、今回、3種のセットトップボックス (STB) が紹介されていた。**ヒューマックス・ジャパン、パナソニック、テクニカラー・パイオニア・ジャパン**の製品だ。この内のヒューマックス製 STB「SR-4300」は、ジュピターテレコムへの加入者専用とのことであった。パナソニックとテクニカラー・パイオニアは、4K 放送受信専用と HDD 内蔵型の 2 種を揃えていた。

なお、ブースの片隅には、**ニコン、JVC ケンウッド、ソニー**の 4K ビデオカメラも並んでおり、放送受信だけでなく自撮りの 4K 映像も楽しんでもらいたいとの強い意志が感じられた。3 種の内、特にニコンの超小型アクションカム「KeyMission 170」に興味深く見入っている来場者が多かった。

**ソシオネクスト**は、ブースにシャープのカメラ、アストロデザインのクロスコンバーター、自社特製のエンコーダー・デコーダー、4 画面マルチディスプレイを並べて 8K 映像の撮影から再生までのフローを分かりやすく説明していた。ブースの担当者は「この 8K リアルタイムストリーミングシステムは、8K 放送や IP による 8K ビデオ配信に大いに活用ができる」と強調していた。

今年の会場では、VR/AR/MR の出展とデモも目に付いた。代表的な出展者としては、KDDI、NTT テクノクロス、富士通、KOMATU、三菱電機、竹中工務店、東日本高速道路、タイコ・エレクトロニクスなどが挙げられる。

**KDDI**は、アメリカの Osterhout Design Group (ODG) 製スマートグラス「ODG-R9」を装着して体験するバッテリー、観光地のガイドを想定した「VR VIEW SCOPE」、半球状スクリーン「Sphere 5.2」、12K 360 度画像対応 VR システムなどを紹介してひと際来場者の関心と呼ん

だ。説明員によれば、「KDDI は、ODG と日本国内における VR/MR 技術を活用するアプリケーション開発協定を締結しており、すでにプロ野球観戦で実証実験を行っている」という。このような背景を知ってか、ODG 製スマートグラスを装着して行うバッテリーコーナーには、体感希望者が殺到していた。

「VR VIEW SCOPE」は、コインを入れると 3D VR 映像が体験できる仕組みで、観光地によくある望遠鏡と似たオペレーションを想定している。組み込まれた VR ゴーグルのメーカーを聞いて見たが、明確な回答をえられなかった。

「Sphere 5.2」は、**Wonder Vision**社が考案した幅 5.2m、高さ 3.4m、奥行き 2.6m の半球状スクリーンに 4K や 8K の映像を投影して楽しむシステムである。6 種の自由度モーションデバイスと立体音響装置を組み合わせ、HMD や偏向メガネなしで特別な映像体験ができるのがミソである。

12K 360 度画像対応 VR システムでは、金沢市、飯田市、豊岡市などの観光ツアー体験が提供された。HMD には、スマホ対応の Oculus Gear VR が使われていた。

**NTT テクノクロス**は、8K 超の高精細 360 度映像を視聴できる「パノラマ超プレイヤ」を出展した。魚眼レンズを装着したパナソニックの 4K カメラ 5 台で撮影した展示会場の映像をライブ配信して、HTC 社の「VIVE」HMD を使って来場者に視聴を促すシステムを組んでいた。ブースの技術者によれば、「将来は、5G ネットワークを使って伝送することを想定している」という。

**富士通**は、同社のコミュニケーションロボット「ロボピン」と、HTC 社の「VIVE」HMD とハンドコントローラを連動させた華やかな VR デモを実施して脚光を浴びた。9 体の「ロボピン」の中心に立つロボットを相手に来場者がいろいろなアクションを要求すると、巧みにフォローするという面

白い光景が見られた。

スマートコンストラクションプロジェクトを推進している **KOMATSU** は、VR による「HOLO DIORAMA」のデモで注目を集めた。コンセプトは、面白法人を自認する **Kayac** (本社：神奈川県鎌倉市) が考案し、HMD とハンドコントローラは ASK が HTC 製「VIVE」を提供していた。モデルデザインを行ったのは、**CRICO** 社とのことであった。

**三菱電機**は、世界最高速エレベーターによる VR 体験を提供して注目を集めた。筆者は、試みる時間がなかったが、「Oculus VR」HMD を使って、高層ビルの地下 2 階から 119 階までエレベーターで一気の上昇する体験ができるというのがミソである。同社のブースでは、コンセプトカー「EMIRAI4」と VR による試乗体験も行われていた。なお、三菱電機は、広い「CEATEC2018」の展示会場で唯一、衛星のモデル (温室効果ガス観測衛星 2 号、GOSAT-2、いぶき 2 号) を出展し気を吐いていた。同衛星は、展示会の後、10 月 29 日に H-2A ロケットで成功裏に打ち上げられている。

**竹中工務店**は、「Acer Windows MR」という珍しい HMD を使って免震技術の体験ができるデモを実施した。実際にトライしてみたら、震度 6 の地震が発生しても被害が発生しない構造上のメカニズムがよく理解できるシナリオになっていた。

**東日本高速道路**は、子会社のネクスコ・エンジニアリングとインフォマティクスが共同で開発したという MR 技術を活用した保全技術高度化支援ツール「PRETES-e」を売り込んでいた。「ホロレンズ」を着用するシステムで、担当者は、「橋梁の内部を可視化することで構造的な要因や外的な要因によって発生する変化や劣化のメカニズムが学べる」と PR に余念がなかった。

Naoakira Kamiya  
衛星システム総研 代表  
メディア・ジャーナリスト